

BlackDogs

Kuroneko Satou



Black Dogs

黒ねこ作

登場人物一覧

【八倉直人】ヤグラ ナオト

今回の主役であり、第四次大戦中は「暗殺者」と呼ばれ、敵味方に恐れられた青年。両親が暗殺されたことが切っ掛けで日本国防軍に入隊し、第307特務機関へ配属。後に同僚だった雪島沙希が殺されたことを理由に軍から逃亡した。今は廃墟の東京で無免許の義術医として生きる。

【レイヴン】

傭兵派遣会社ブラックドッグズに所属する傭兵でフィリピン系の少女。

第四次大戦で両親と妹を中国軍に惨殺され、自身もレイヴンされた過去を持つ。

「顔無し」と呼ばれる特殊工作員を復讐のために追っている。

【サーニヤ】

レイヴンと行動する傭兵でロシア人の少女。
洗脳処置で精神年齢が六歳前後のまま止まっている。

【神近 梓】 カミチカアズサ

傭兵派遣会社ブラックドッグズの社長で「少佐」で知られる戦争中毒者の女傭兵。
日本国防軍在籍時代は「走狗」と呼ばれた第113特殊戦闘部隊を率いた。
煙草は一日二カートンが当たり前なヘビースモーカー。

【エルヴィ】

神近を「少佐殿」と呼ぶ秘書のようなドイツ人の少女傭兵。
常に防弾仕様のメイド服を着ながら神近の身の回りを世話している。
日本語が堪能で頭の回転も速い。

【顔無し】カオナシ

本名、性別、年齢が一切不明な特殊工作員。

亡霊部隊と呼ばれる新日本国防軍の非正規部隊を率いる中佐。

自称「真の愛国者」のエゴイストであり、日本新政府の後ろめたい真実を知る人物。

【久間 迅蜂】ヒサマジンパチ

亡霊部隊所属の大尉。

第四次大戦中は「白狼」の名で知られた人間兵器のような男。

毎日のようにホットドッグを食うホットドッグ中毒者である。

【影重 美月】カゲシゲミツキ

亡霊部隊所属の中尉。

軍刀を愛用する古風な戦闘スタイルの女。

女の武器を利用することを厭わない人物で、実年齢を知った者は葬られる。

【ナタリア・クライン】

ロシアマフィアのワルシャワゲート日本支部にいる副支部長。
元ロシア陸軍スペツナズの大尉で痛めつけた相手が苦しむ顔を見るのが好きな拷問のスペシャリスト。
ロディオンの愛人で絶対の忠誠を誓っている。

【ユーリ・ロマノフ】

スペツナズ所属の元ロシア軍人。最終階級は曹長だった。
ナタリアの側近としてワルシャワゲートにいる。

【ロディオン・ガリーニン】

ワルシャワゲート日本支部の支部長で元スペツナズの大佐。
第五次大戦で再びアメリカ兵を殺せる日々を心待ちにしている戦争中毒者。

【スミス・スターロン】

廃墟の東京で銃器や義術部品を加工している自営業の若者。
大の女好きだが修理と改造の腕だけは確かなアメリカ陸軍の元兵士。
直人の友人で銃器に詳しいが若干オタク気質などところがある。

【雪島沙希】ユキシマサキ

日本国防軍の情報分析官をしていた電子関係の天才。
同僚である直人の両親の暗殺を独自に調査中、内部の何者かに殺されてしまった。
直人を密かに愛していたが死に際まで言い出せなかった。

【八倉甚】ヤグラジン

義術医療を生み出した天才外科医で直人の祖父。
非人道的な研究に罪の意識を持っておらず目的のためなら手段も選ばない。
現在は行方も生死も不明とされている。

〔義術医療〕（ぎじゅついりょう）

損失した患部を人工部品へ置き換える代替医療。「義術」と省略するのが一般的。脳と脳幹を除く人体の九割を人工化させる全身義術化は俗にサイボーグ医療と呼ぶ。外科医の八倉甚により開発され、多くの難病患者や傷痍軍人の治療に貢献した。ちなみに義術化処置、負傷箇所の修復などを行う専門医を義術医という。

〔特殊工作員〕（とくしゅこうさくいん）

軍情報部や参謀部に所属する非正規戦専門の工作員。

諜報活動、要人暗殺、破壊工作、敵地潜入など分隊規模か単独で作戦行動に当たる。情報分析官のサポートを受け、諜報員と工作員の両方を兼ねて動く実動要員。日本国防軍にしかない兵種であり、海外では準軍事担当官と呼ばれる。

Black Dogs (試読サンプル)

「動機とは感情である。生きていくうえで、肉体や精神を大いに動機づけるもの、たとえば、生き残り、飢え、渇望、復讐、愛などは、みな感情の塊だと言える」

自己啓発作家 デニス・ウェイトリー

第一章

八倉直人は絶句していた。愛用する自動拳銃を一挺ずつ握った両手が小刻みに震える。それが怒りからなのか、それとも恐れからなのかは自身でもわからない。

瞳に映った少女がこちらを見上げて力なく笑う。

いつも彼女は年下を扱うように同い年の直人をからかった。普段なら間違ひなく小馬鹿にするような意味を含んだ笑い方。だが、今の彼女が浮かべる笑みの意味は違った。

本当に困ったタイミングで見つかってしまった。そう言いたげな苦笑である。

依然として両手の震えは止まらない。加えて、両足は棒へすげ替えられたように動かさなかった。だが、頭は異常なほど冷静に現状を把握している。

艶やかな彼女の黒髪はショートカットだ。それがスプリングラーの飛沫を浴び、毛先から水を滴らせた。ノースリーブの左胸に赤黒い染みが滲んで広がる。

それを上から隠すように手で押さえ、壁へもたれ掛かったまま座っていた。

「……やあ、ナオ」

侵入者へ抵抗したときに使ったのだらう。彼女の右手には自動拳銃があった。

今の自分に彼女を——雪島沙希を助けられる術はない。こうしている間にも彼女は眼前で息絶えようとしている。それすらも悟ったうえで、彼女は笑いかけているのだ。

ノックもせず部屋へ入って来た同僚にいつもの調子で軽口を叩いた。

「……そんな顔してちゃ……せつかくのイケメンも台無しだよ……」

きっと自分はひどく情けない顔をしているに違いない。迷子が泣き出す一步手前のような表情なのだ。手から拳銃が滑り落ちたのも忘れ、駆け寄った彼女の肩を抱き起こす。半脱ぎの白衣の下、濃緑のノースリーブから露出した素肌の冷たさにぞっとした。

「ここで何があつた？」

「……落ち着いて」

「誰がやつた？ どの誰がッ！」

「……ナオ……お願いだから。ね？」

口端から顎へ伝つた血の雫が、水溜りへ落ちるたびに波紋を広げ、絵具を水へ溶かしたようにじわりと赤が増す。少しずつ溶けた命が水面へ広がるほど色は濃くなつた。

「くそッ」

抱え上げようと膝下に伸ばした直人の腕へ触れ、沙希は小さく首を横へ振る。

「もう間に合わないから」

「黙つてろ！ 今、本部の医務局へ運んでやる！」

「ナオだつて……うん……ナオだから、もう間に合わないってわかつてる。違う？」

「……違う！ 必ず助かる。助けてやるから！」

徐々に温かみを失いつつある彼女の手が頬を撫でた。

「じゃあ、どうして泣いてるの？」

優しい微笑みを前にぐっと嗚咽を呑み、しゃくり上げそうになるのを堪える。

彼女を見つげるときから腹が立つほど理解していた。ただ、それを認めたくなかつただけにすぎない。胸の奥底から込み上げるやるせなさど悔しさが結論を拒んでいる。

彼女は眉尻を下げ、か細い吐息を漏らした。

「……強がりなんだから……」

「肺に穴開けたまま喋ってるヤツが言えたことかよ」

「……あはは……そうだね。私も——」

急激に咳き込み、血塊を吐き出す。直人が慌てて背を擦った。

「ば、馬鹿！ 無茶すんな！」

「ううん。ナオに伝えないと。怒らずに聞いて。やつと、わかつたんだ。何もかもが」

「え？」

「……私の思った通り、ナオの両親は敵に殺されたんじゃない。軍部が口封じに殺したんだよ。命令を出したのは、軍技研の八倉甚……君のお祖父さん……」

ギリツと奥歯を噛んで彼女の肩を抱き寄せる。

「もういい。それだけで、十分だ……」

「……私、やつと理解したんだ。君の才能は……この国なんかの為に、もう誰かを殺すために使うべきじゃない……誰かを助けるために使うべきなんだよ……」

「……やめてくれ。もう喋るな……」

「じゃあ、顔を見せて」

沙希は肩を離れた直人へ唇を重ねた。別の生き物のように彼女の唇が温かく柔らかい。近づいた首筋や髪から柑橘系の香りがする。彼女が好むシャンプーの匂いだ。

ただ押し当てられたキスなのに、直人は官能的な心地よさを感じていた。

沙希が名残惜しい様子で唇を離した。日なたで咲く向日葵のごとく満足げな笑みを浮かべている。これで未練はない。彼女の表情がそう言っているように思えた。

「やっと素直になれた。ごめんね。もっと、早く……できてたら、よかったのに……」
眠るように目を瞑る彼女を震える腕で抱きしめた。

いつから、彼女を想っていたのかは覚えてない。切っ掛けが何だったのかも忘れた。

しかし、優秀な同僚でも、良き理解者でも、親友でもなく、雪島沙希という一人の女性を愛していたことだけは、自身の内に抱いた紛れもない事実だったのだ。

「うあああああああああああああッ！」

そうでなければ体が張り裂けそうな悲鳴を上げるはずがない。自身を壊しかねない怒りと堪えがたい痛みが、身を抉るような激情となって押し寄せることに説明がつかない。

だから、嗚咽混じりの唸るような呻き声を漏らし、無様に泣き続けた。
どうしようもなく子供のように大声を上げて泣き喚いた。

あの日から一年と数ヶ月が過ぎ、八倉直人は銃を握る生き方を捨てた。

1

——義術により脳以外を人工化した人類が当たり前となった時代。世界的な都市の大半が瓦礫と廢墟に変わっても、そこから人々の営みが消えてなくなることはなかった。

直人の運転するオフロードバイクが瓦礫の破片を踏み散らした。分厚く凹凸だらけのタイヤが瓦礫を乗り越えるたび、ハンドルの真ん中にぶら下げた携帯ラジオが途切れる。「この十八年間に人類は二度の世界大戦を起こしました」

バイクの車種はKLX250であり、カワサキの純正品だ。少し前まで軍の偵察用單車だった名残がOD（オリブドラブ）のボディカラーに表れている。

「第三次大戦は核と自律兵器の戦争でした。各国が資源とエネルギーを奪い合い、米露が小諸国の併合で砲火を交えました」

元舗装路のアスファルトには様々な残骸が転がっている。大半がコンクリートの塊や石膏ボードの欠片、それに粉々のガラスだ。その他にも錆びた空缶、首や腕のもげた展示用のマネキン、杵だけの電光掲示板など、粗大ゴミのような物が無造作に放つてある。

「第四次大戦は義術の戦争でした。兵士が機械の肉体を持ち、東アジアを主戦場にした総力戦です。同時に、卑劣な敵国へ我が国が正義を突きつける戦争でもありました」

それらが散在する道は、かつて新目白通りと呼ばれた東京都道のひとつである。

元は三車線ずつの道路も、今は瓦礫の山と地割れで走行できる幅は少ない。両側のマンションやビル群は解体途中で放置されたように鉄筋や建材が剥き出しのままである。

ハンドルと体重を右へ傾け、器用に黄色だけが壊れた信号機のある三叉路を曲がった。そのまま神高橋という半濁した神田川の上へ掛かる道路橋を走り抜ける。

「あの大戦で、我々日本人は多くを失いました。東京を始めとした都市の大半が焼かれ、総人口の三分の一が無残な死を遂げました。そうした悲劇を繰り返さないためにも、我々は強い日本の復興を急がなくてはならないのです」

旧JR高田馬場駅前、早稲田通りに出る交差点の右端へ寄せてバイクを止めた。

「——強い日本を取り戻そう！ 平和で豊かな社会を実現する政党、自由国民党です。日本新政府広報が午前七時をお知らせします」

エンジンを切った直人が乱暴にラジオの電源を落とした。アーミーブーツの踵でスタン드를引っ掛けて立てる。日差し強い空をサングラスを掛けた顔で嫌そうに見上げた。

「……暑いな。この時間で二十七度はあるんじゃないのか」

乱雑に刈ったような黒い前髪を掻き上げ、手の甲で額の汗を拭う。人間の適度な気温は約二十度前後だと言われている。もちろん、湿度や風の有無、さらに年齢、性別によっても感じ方は変わるが、それでも二十五度を超えれば誰でも「暑い」と感じるだろう。

ライダージャケット代わりに来た上着の前を開け、白いシャツの胸元を扇いだ。炭素繊維が使われた上着は軍用規格品で、軽く丈夫なのが気に入っている。ただし風通しが悪い点だけは否めない。べったりと汗でシャツが張りついた背中に不快感を覚え、

「相変わらず天気予報はダメだな。梅雨前で夏日なんて大ハズレもいいところだ」

と、外したサングラスを辟易とした表情で胸ポケットにしまう。

夏は嫌いだ。特にゲリラ豪雨や夕立の後の湿った外気はもつと嫌いだ。

あれらは闇の底から漏れた瘴気のように、重く纏わりついて身体から離れない。それを浴びていると過去を思い出す。しかも、一番思い出さたくない記憶だけを鮮明に。

深々と息をつくとき陰鬱とし始めた心中を締め出した。

バイクのキーを抜き、目の前の煤けた雑居ビルを見上げた。一階の元コンビニだった店舗へ足を向け、シャッターのから空きな入口から声を掛ける。

「おーい、受け取りに来たぞ」

すでに碎けて役に立たないガラスの自動ドアはない。店内も商品棚やレジスターなどコンビニらしいものは皆無だ。店内の壁際にプレス機や研磨機、ドリルグラインダーが載った長机が置いてある。床はニッケルやステンレスの削りカスが散り、天井からはタグ付けされた多様な色と太さのケーブルが吊るしてあった。まるで、零細下請けの工場だ。

無音の店内は、濃密な機械油とシンナー系塗料や溶剤、ガンパウダーの臭いで空気が満ちている。直人が毎度のごとく返事のない様子に肩を竦めて店内へ入った。

「耳が遠くなつたのか、スミス。頼んでた物を取りに来たぞ！」

ふと耳を澄ませば規則的な呼吸が聞こえる。

レジカウントアの裏を覗けば案の定だった。ビーチで使うような寝椅子で、音漏れした赤いヘッドフォンを付けた男が間抜け面を晒している。

「おまえ、よくそれで寝れるよな……」

爆睡する男の名をスミス・スターロンという。二十一の直人よりも四歳上の白人だ。オールバックにしたオレンジ色の髪をヘアバンドで留めている。煤と油染みで汚れたゴムエプロンをタオルケット代わりに掛け、だらしない表情で寝言を漏らした。

「……でへへ……いいじゃんよ、メリルちゃん……」

彼はアメリカ出身で元陸軍の軍人だったらしい。武器や義術の部品にも詳しく、さらに二十カ国の言葉を話せる語学達者な面もある。とはいえ、それ以上は直人も知らない。

しかし、救いような無類の女好きなことだけはよく知っている。行きつけのバーにいる女の子達と夢でパティーの最中なのだろう。五人目の名前が寝言で聞こえた。

そんな友人の無用心さへ静かに呆れながら、直人がヘッドフォンを外した。

「いいニュースだ、スミス。ブルースクエアの女の子達が一緒に寝たいってよ」
カッと目を開き、素早く伸びた腕が直人の襟首を掴む。

「全員か？」

「お目覚めだな、馬鹿。ちなみに今のは嘘だ」

「フアック！ 飛び起きて損したじゃねえか！ どうしてくれんだよ！」

「知るか。客が来てんに寝てるヤツが悪い」

「ちえっ、ひっでえ客だ。んで、何用？」

「頼んでた義術部品。それと口元、涎ついてんぞ。あと襟にも」

スミスが着ている黒シャツの襟を引っ張り、白い染みをゴシゴシと擦った。

「うわっ、マジだ。それを先に言えよ」

「だから今言っただろ……」

「ちっと顔洗ってくる。あ、加工が終わったやつは足下な」

そうスミスが言い残して店の奥にある手洗い場へ入って行く。

直人が視線をカウンタ下へ移すと青い折畳みコンテナ、いわゆる「オリコン」が置いてあった。山盛りに積まれた部品にはタグ分けがしてあり、しゃがんで検品を始める。

タオルで顔を拭きながら三分ほど戻ったスミスは眉尻を下げた。

「てか、何時に起きてんだ。まだ七時？ おいおい、人間の起きる時間じゃねえぞ」

「生憎と俺の朝は四時間前に始まってんだよ」

直人の朝は早い。外が暗い午前三時に起き、五キロを一時間を掛けてランニング。軍隊式の筋力トレーニングを数セットこなして、人肌よりも熱めなシャワーを頭から浴びる。規則正しい生活の見本のようなのだが、未だに軍人だった頃の習慣が抜けないだけだ。

それを聞いたスミスが渋い表情で呻いた。

「そいつは健康的なことだ。全身義術化すりゃ脳ミソの健康管理だけで済むつてのに」
「俺は生身の体が気に入ってるんだ」

「物好きなヤツ」

「お前だって義術化してるのは臓器以外だろ。内臓の疾患でくたばっても知らないぞ」

「へいへい。その時はおまえに頼んで換装してもらおうよ」

「知らん。黙ってたばっとけ」

義術化や義術と呼ばれる医療分野の確立から約十五年。俗にサイボーグと呼ばれる技術を用いた人類は、脳と脳幹を除けば体を人工化できるようになっていた。

骨は軽鐵鋼と衝撃吸収樹脂で作られ、ナノファイバーに特殊樹脂を用いた皮膚は生身と遜色ない感触と強度を持つ。外見こそ変化してないが、その強靱さは比にならない。

しかも、脳以外は病に罹らないも同然だ。全身義術化した人間の死因は脳死やショック死、失血死が大半であり、百数十種もの難病患者すら義術化することで九割は救える。

この話だけだとロボコップのようなサイボーグを思い浮かべる人が多いだろう。

事実、義術化が始めた頃は、そんな噂も少なからずあった。とはいえ、アレックス・マーフィーのように死体となってからサイボーグ化するのには義術でも不可能だ。

スミスはタオルを寝椅子へ放って笑う。

「しかしまあ、義術医つてのもハードなものだ。時間外診療なんてざらだろ？」

「別に。俺が早いだけだよ。うちの患者が普通じゃない連中だらけなのは認めるけど」
「でも、儲かる？」

「悪徳なモグリと一緒にすんな。俺は払えるヤツにしか請求してない」

一見万能にも見える義術も調子が悪くなることはある。

それを診るのが義術医という専門医の仕事だ。ただ一概に診るといつても、義術部品の修復や調整、義術化処置の外科手術、などと並の医者よりは仕事が多い。

それに加えて、各医療分野の人体に関する高度な知識と治療技術を学ぶ必要もある。直人の手で検品を終えた部品がカウンターに並ぶの見ながら苦笑する。

「相変わらずお人好しの天才なこつて。新都へ行きやあエリートだつてのにさ」
「どこにしようが俺の勝手だろ。おい、何個か足りないぞ」

スミスが小さく両肩を上げ、ジーンズの尻ポケットから煙草とジップライターを出す。
「悪い。まだ加工終わってねえんだ。すぐやるから待つてな」

煙草の銘柄はアメリカンスピリットのウルトラライト。オレンジ色のケースをトントンと叩いて一本啞え抜く。ライターで火を点け、黒シヤツの胸ポケットへ押し込んだ。

エプロンを付けると研磨機の前にある丸椅子へ座つて作業を始めた。

「二十分くらい待つてくれ」

キインと響くグラインダーで消えないよう音量を上げて返した。

「急がなくていいから丁寧にやれよ」

「馬鹿言うな。いつだって繊細な女の子を抱くみたいに優しく扱つてる」

ブラックコーヒーを濃縮したようなアメリカンスピリットの紫煙が直人の鼻腔を擽る。この匂いは嗅ぎ慣れている。直人は非喫煙者だが軍の同僚は喫煙者ばかりだった。

特にスミスの吸う銘柄は雪島沙希も好んで吸っていた。彼女なりに謎のこだわりがあったらしく、とりあえず拗ねたときは一箱渡すと機嫌が直ったものだ。

スミスが器用に手先を動かしながらしゃべった。

「ラジオでも聴いてたらどうだ？」

「政府宣伝が八割の放送を聴くなら、黙って待ってるほうがマシだよ」

「それもそうか。まあ、閉鎖政策のせいで音楽番組も壊滅。今やニュースと新政府認可の面白くもないトーク番組だらけ。で、四六時中流れる政党、あー……何だっけ？」

「自由国民党」

仏頂面の直人を指差してスミスが口笛を吹いた。

「そう、それ！ その何たら政党のCMばかりでうんざりだ。もっとロックとかメタルとかジャズでもいい。そういう音楽をバリバリ流すような番組をやって欲しいよなあ」

人類が第四次大戦を終えて一年半が経とうとしていた。

世界中に刻まれた戦争の爪痕は深い。地図から小国や大都市が消え、疲弊し切った各国家は戦前の勢力を大幅に失った。そもそも、第四次大戦ですら国内の経済崩壊や社会体制の維持不能などで、戦争当事者の国々が自然停戦したことで終わったのだ。

この戦争に勝者は誰もいない。当然、大戦を報復戦争と唱えた日本もそうだ。

西暦二〇三五年十月一日、第四次大戦の引金となった一〇一事変が起きた。

日本の人工密集都市に対するミサイル攻撃。中国、南北朝鮮軍による無差別大量殺戮は総人口の約三分の一を死へ追いやった。関東圏は東京を中心に焼尽へ吞まれ、政令指定都市や太平洋工業地帯の九割が壊滅している。被害が軽微で済んだのは東北地方と北海道ぐらいなものだ。その証拠に戦中の臨時政府は宮城県仙台市に置かれていた。

ミスミがグラインダーで表面を整えた部品を手に鼻で笑った。

「んで、アメリカの手を借りて報復に出た、と。まったく、日本人つてのはサムライのいた時代から敵討ちが好きだよな」

カウンターへ寄りかかった直人は吐き捨てるように述べた。

「戦前から領土問題と外交、移民問題で火種はあった。それが例の攻撃と臨時政府の煽りで火がついたんだ。でも、一番の問題は誰一人として疑いもせずに賛同したってことだ。そんな下らないことよりやるべきことがあったはずなのにな」

「要するに政治家が無能ってことだろ？ その証拠に日本の閉鎖政策はデイストピア化しちまつてる。もう少しやり方なかったのかって思うぜ」

戦後、臨時政府は「日本新政府」と改称し、そのまま仙台市を首都としている。

ミスミの述べた「閉鎖政策」は流入難民規制法案のことだ。東北地方以西は廃墟や瓦礫の都市が多い。それを国土と定めると復興に莫大な金と手間がかかる。特に戦中から放棄されていた東京や関東圏は復興不能と考えてもいい。

それ故に政府は東北六県を国土と規定すると他県を切り捨てた。

山形と福島に国境線を引き、同じ日本人でも健康や年齢、性別で入国を制限する。外国人は政府関係者や特権階級層を除けば入国審査すら受けられなかった。

この閉鎖政策自体はアメリカやロシア、EU圏でも行われている。非常に馬鹿げた話だが、それでもしないと財政や社会体制を維持できないのが実情なのだ。

日本は特に審査が偏向した国である。だが、それに異を唱える者はいない。批判する者はテロリスト予備軍として新政府に捕まるからだ。

ちなみに北海道は新政府の政策を蹴り、ロシアと同盟を締結後に「独立国北海道」として分離独立したらしい。現在の津軽海峡は北海道軍と新政府軍が睨み合う国境だ。

一応、日本は戦中から議会制民主主義を採っている。ただ、その実態は自由国民党という与党の一角独裁体制ではない。彼らは戦中以前から与党の座にいる。

第三次、第四次ともに敵国の中国は中国共産党の一角独裁国家だった。それを批判して戦った民主主義国の未来が一角独裁体制というのは笑えない皮肉だ、と直人は思う。

そんな心中を表すように口辺へ冷笑を浮かべて訊いた。

「この国で有能なヤツが政治家になれると思うか？」

「無理だね。そもそも、有能なヤツはうんざりして立候補すらしない」

「だろうな。ところで、一昨日まで並んでたカラシニコフはどうしたんだ？」

「カラシニコフ？ ああ、ベリルのことか」

「ベリル？」

研磨した部品をウェスで拭きながら答える。

「正式名称はK b s w s ・ 1 9 6 6、ポーランド製のAKライフルだよ。ワルシャワの連

中から使えるように仕上げろって注文請けてさ」

「ワルシャワゲートから？」

ワルシヤワゲートは東京に勢力を持つロシアマフィアだ。訝しい表情を浮かべた直人が詳しく聞こうと口を開いたときだった。近場の爆発音が小刻みに壁や床を震わせる。

「おい、今の爆発——」

ここでは銃声や爆発音ぐらい日常茶飯事だ。国籍も人種も様々な無法者と軍人崩れが集まり、組織や個人で金や主義主張のために紛争を起こす。無法地帯のホットゾーンは戦後世界のどこにでもある。世界大戦は終わっても人間の欲望が尽きない限り、何千年過ぎようとも闘争は終わらない。だが、壊す者がいれば直す者もいる。

「つたく、どこのバカだ。こんな時間からドンパチしやがって……」

直人が暢気なスマスを無視して入口へ出た。

早稲田通りを突っ切った先にある廃墟の商業ビル「ビッグボックス高田馬場」が爆発元らしい。ビル正面の壁に大きな穴が空き、濃い黒煙が噴き出ていた。

二度目の爆発が起き、建材の破片が煙の外へ吹き飛ぶ。

「なっ」

爆発で放り出された中に子供がいた。気絶しているらしく、重力へ引かれるまま地上に叩きつけられる。険しい顔つきで振り返った直人が質した。

「スマス！ あのビル、何階建てだ！」

「い、いきなり、どうしたんだよ」

「いいから！ 早く答える！」

「元は九階だったかな？ けど、今は七階より上は吹き飛んでって、おい！」
最後まで聞く前に直人が外へ飛び出した。

「あいつ、何を慌ててるんだ……」
スミスは無然とした顔で首を傾げ、作業の終わってない部品を削り始めた。

2

直人は黒煙を噴くビルを見上げながら早稲田通りを突っ切る。
子供が投げ出されたのは六階か七階だ。落ちた場所は大小様々な残骸が転がるアスファルト。いくら義術化されていたとしても当たり所が悪いと無事では済まない。

近づくほど空気が埃っぽい。ガスやゴムの焼けるような悪臭が強くなった。その中に硝煙が混じっている。よく知っている硫黄のような火薬の臭いだ。

「こいつは……」

煤煙の中で断続的な銃声と金属の擦過音が響く。妙に軽い三点バーストの銃声。アサルトライフルの類じゃない。拳銃弾を使用する短機関銃かマシンピストルの類だろう。

一先ずは落ちた子供を探す方が優先だった。色落ちした青の壁板とコンクリート塊に挟まれた足先が見える。駆け寄った先で仰向けに倒れていたのは十四歳ぐらいの小女だ。

怪我に注意しながら破片や屑板を押しやり、すぐ傍で立て膝をつく。右肩と左の脇腹、太腿の負傷に加えて、全身へ鋭利な切っ先で斬ったような細かい裂傷がある。

軽傷とは言い難いが、少女は幸いにも全身を義術化している。その証拠に患部から切れた人工神経と人工筋肉が見え、溢れる化学血液の赤銅色に濡れていた。

あどけない幼顔の白い頬を軽めに叩き、意識の有無を確かめる。

「しっかりしろ！ 俺の声が聞こえるか！」

全くといってよいほど反応がない。衝撃に脳をやられた可能性もある。

すぐにジャケットの内ポケットから抜いたペンのような機器をこめかみへ当てる。ブレインチェッカーと呼ばれるもので、脳波を簡易測定できる義術医の仕事道具だった。

いくら全身義術化していても脳を損傷したらお終いだ。どんな屈強な者も脳だけは鍛えることができない。デジタル画面を祈るように見つめ、ほうと安堵の息を漏らした。脳波の数値は一時的な深い昏睡。つまり、脳震盪などが原因の気絶である。

チェッカーをしまうついでにジャケットを脱ぎ、着ていたシャツの裾や袖を裂いた。

各止血点の心臓寄り十センチ程度で、出血が酷い患部を手頃な大きさの破片を当て木にして縛る。ズボンのベルトを抜き、左太腿の付根辺りをきつく締めた。止血帯法という止血の仕方、単に血を止めるだけなら一番手っ取り早い。ただし、生身の人間だと患部が壊死する危険性も高まる。だが、義術化している相手なら気にしなくていい。

直人が応急処置を終えて顔を上げたとき、煙から二人の人影が飛び出た。

一人は濃緑色の詰襟軍服を着た女だ。右手に白銀の刃が光る軍刀を持ち、軍服と同色のロングスカートを穿いている。そのスリットから均整の取れた肉づきの良い両脚が覗き、黒い艶のある長髪がふわりと風で広がる。

もう一人は褐色の肌をした少女だった。やや乱雑に刈った短い黒髪は見る者に野生的な印象を与える。少し吊り気味の目が猫科の動物を髣髴とさせた。

彼女は黒のミニタンクトップにOD色の多機能ズボンという格好だ。両脇にはシヨルダ―ホルスターを下げている。そこに左右の手が握る自動拳銃が収まっていたのだろう。

自動拳銃の種類はベレッタM92Fのようで微妙に違う。トリガーガードに簡易フォアグリップがあり、消炎用の溝が数センチ飛び出たバレルへ空いている。

「三点バースト、マシンピストル……なるほど。ベレッタM93Rか」

二人には直人の呟きなど聞こえていない。少女が犬歯と殺意を剥き出し、落下しながらも容赦なく弾を叩き込む。激しいマズルフラッシュが瞬いた。二挺の排莖口から忙しなく空莖莖が吐き出される。女は薙いだ軍刀で亜音速の銃弾を余裕綽々に斬り飛ばす。

直人は啞然とした。居合いの達人は射手の動作を見切ることと銃弾を斬れるという話がある。だが、一度の射撃で三発を撃つ三点バーストを一振りで斬り落とすなど尋常ならざる動体視力だ。女の両目が義術眼だとしても驚異的な能力と言わざる負えない。

女が着地の間に後方宙返りで距離を空ける。少女は両目を細め、一階出入口の軒先を蹴り飛ばして着地。クッション代わりにされた屋根が派手に拉げた。

それを見ていた直人が渋い顔をした。

「……無茶苦茶だ。足が折れるぞ」

義術化で耐久性を上げて強度には限界がある。どんな高性能な部品を使っても人体のパーツを模している以上、負荷の掛け方が悪ければ簡単に折れてしまう。

その時、少女と目が合った。こちらを値踏みするような薄茶色の瞳に強い意志がある。それでいて刃のように触れたら切れそうなほど鋭利だ。直人が応急処置した少女を一瞥すると少し驚いたように両目を開く。その間隙に狙いを定めた女が接近する。

少女は女を目端で捉えていたらしい。舌打ちすると弾をばら撒いて牽制した。女があつさりとなげいて肉薄。少女は振り落とされた刃をバックステップでかわす。

直人は我に返り、金髪の少女を抱えてバイクまで走る。真っ先に荷台へ下げたバッグからゴムバンドを出した。それで背負った少女と自分の身体を巻きつけて固定する。ちよんどうエンジンに掛けたタイミングでミスが戸口から出て来た。

「おいおいおい……。何がどうなってるんだ？」

ぼかんとした顔へ直人が背中の中の少女を顎で示した。

「見ての通りだ。悪いけど部品は預かっていてくれ」

「そりゃいいけど」

わずかに車体を右へ傾け、ブーツの踵でサイドスタンドを倒す。駅の高架橋下で戦っている二人をミスに示すと苦笑を湛えた。

「言ったろ？ 俺の患者は普通じゃない連中だらけなんだよ」

「……オーライ。よくわかった」

「一応、流れ弾に備えてシャッター閉めとけよ。怪我しても知らねえぞ」

「アレをシャッターで防げるのか？」

「さあな」

そう答えるとバイクをドリフトで左折させ、一気に早稲田通りを東へ疾走し始めた。

Black Dogs

発行日

2015年8月14日 コミックマーケット 88

発行者 よろづ屋本舗

<http://yorodukatudousi.dou-jin.com>

yoroduyahonpo@gmail.com

著者名 黒ねこ作(@gretelproject)

<https://twitter.com/gretelproject>

イラスト 山田サトシ

編集 黒ねこ作

本書の著作権は著者にあり、著者に無断で本書の内容の一部または全部を無断で複写(コピー)することを禁止します。

また、この作品はフィクションであり、実在する個人、団体とは一切関係ありません。



Black Dogs

ILLUSTRATION
Satoshi Yamada